

日本史 A、日本史 B

第 1 高等学校教科担当教員の意見・評価

日 本 史 A

1 前 文

今年度の大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）は、現教育課程になって6年目の試験である。「日本史 A」の受験者数は4,622人で、昨年度に比べて528人（約12.9%）増加した。センター試験全体の受験者数は7,193人（約1.38%）増加し、地理歴史科全体でも2,792人（約0.77%）増加したが、「日本史 A」の受験者数の増加率はそれを大きく上回った。

一方、今年度の「日本史 A」本試験の平均点は52.01点で、昨年度より3.59点上昇し、標準偏差は17.10と昨年度より3.72ポイント上昇した。この要因としては、受験者が比較的苦手としている「年代順に配列する問題（6 択）」の出題が、7 題（21 点）から4 題（12 点）に減少したことや一つの事項を深く掘り下げる問題が減少したことなどが考えられる。「日本史 A」本試験平均点と「日本史 B」本試験の平均点（64.11 点）との較差も12.1 点と、昨年度に比べて縮小した。今年度は「日本史 A」の設置の趣旨を生かす良問が多かったと評価できる。今後は「日本史 B」との平均点較差の更なる縮小や平均点60 点を目安とするセンター試験の本旨・目標にそった出題が強く望まれるが、そのためにも高等学校における授業時数や実態に合わせた適切な出題内容、難易度については更なる検討を行い、特に「日本史 B」との共通問題については平均点に与える影響が大きいので、問題作成上において御配慮をお願いしたい。

以下、今年度の問題について(1)～(4)の視点で分析を行った。

- (1) 高等学校学習指導要領（標準2 単位）に準拠し、教科書の内容や授業実態に即したレベル・範囲・内容の問題であったか。
- (2) 「日本史 A」設置の趣旨を生かした「世界史的視野に立った理解」や「歴史的思考力」を評価する問題であったか。
- (3) 分野別バランスがとれていたか。
- (4) 出題方法や表現などが適切であったか。また、60 分の試験問題としてふさわしかったか。

2 試験問題の形式・分量・範囲

- (1) 出題形式では（表1）、「二つ以上の事項（人名・単語など）の組合せ」の設問が9 題を占め、昨年度に続いて問題数・点数（26 点）ともに最大であった。一方、「正しい事項（人名・単語など）を選択」「誤った事項（人名・単語など）を選択」させる設問は全く出題されず、この出題形式は3 年連続で出題されなかった。こうした傾向が定着していくとすれば、問題分析に当たって項目立てを見直す必要も出てくると思われる。「古いものから（年代）順に配列」させる設問が昨年度の7 題（21 点）から4 題（12 点）と大幅に減少したことは、全体の平均点を上昇させる要因になったと思われる。それ以外は昨年度とほぼ同様で、全体的に見てバランスの良い出題で

あった。

- (2) 全体の分量は、大問6題、問題数34題で、昨年度と同様である。また、第3問と第5問の計12題(35点)が「日本史B」との共通問題であった。正答を導くのに複雑で時間のかかるような問題もなく、例年並の適切な分量であった。

本試験の設問形式(表1)

()内は配点

設 問 形 式	平成23年度	平成22年度	平成21年度
正しい事項(人名・単語など)を選択	0題 (0点)	0題 (0点)	0題 (0点)
誤った事項(人名・単語など)を選択	0題 (0点)	0題 (0点)	0題 (0点)
二つ以上の事項(人名・単語など)の組合せ	9題 (26点)	10題 (28点)	7題 (21点)
正しい文章を選択	8題 (24点)	5題 (15点)	8題 (23点)
誤った文章を選択	5題 (14点)	5題 (15点)	5題 (15点)
二つ以上の文章の正誤の組合せ	8題 (24点)	7題 (21点)	6題 (17点)
古いものから(年代)順に配列	4題 (12点)	7題 (21点)	8題 (24点)
	34題 (100点)	34題 (100点)	34題 (100点)

- (3) 難易度については(表2)、昨年度の難易度指数3.00が今年度は3.38となり、難易度は上がったと分析できる。設問ごとの難易度を昨年度と比較してみると、今年度は「やや難しい問題」が7題増加し、「標準的な問題」と「やや易しい問題」がそれぞれ4題ずつ減少した。全体的にはやや難化した傾向が認められる。にもかかわらず全体の平均点が上昇したのは、例年受験者の得点率が極めて低い傾向にある「古いものから(年代)順に配列」させる設問の数が大幅に減少したことによるものと思われる。

本試験の難易度(表2)

	問 題 番 号	問題数	前年比
難しい問題	10、13、25	3	+1
やや難しい問題	5、9、11、12、17、18、21、23、29、30、33	11	+7
標準的な問題	1、2、3、6、7、8、19、20、22、24、26、27、28、31、32、34	16	-4
やや易しい問題	4、14、15、16	4	-4
易しい問題		0	±0
難易度指数(難しい順に5～1の指数を与え、平均値を算出)		3.38	+0.38

(委員の合議により、教科書で扱われているかという観点のほか、現場における授業の実態、受験者の実態を考慮し、問題ごとの難易度を5段階に分類した。以上の分析結果の集計が上の表である。)

- (4) 出題範囲を分野別に見ると(表3)、「政治」・「外交」の設問は合わせて13題(39点)から11題(33点)へと減少した。一方、「社会・経済」・「文化」は合わせて17題(50点)から17題(49点)とほぼ昨年度と同様である。受験者が比較的苦手とする「社会・経済」・「文化」が昨年度と同様に全体の配点の約半分を占めたことにより、難易度が上昇したものと思われる。今年度も「史料・グラフ・地図・図版等」を用いた出題が6題(18点)あったが、昨年度より2題増加し、地図を用いた問題も1題出題された。地理的な空間認識は歴史的な知識や歴史的思考力を問う上

で大変重要であるため、ぜひとも地図を用いた出題をお願いしたいという昨年度の要望が取り入れられたものとして評価したい。時代別に見ると、「近代産業の発展と国民生活」の項目からの出題が1問もなかったことはややバランスを欠いており、次年度以降の改善を要望したい。

本試験の時代別・分野別出題傾向（表3）

②は2点問題、他は3点問題である。

区 分		政 治	外 交	社 会 経 済	文 化	史料・グラフ 地図・図版等	問題数 (配点)
歴史と生活	衣食住の変化						0題(0点)
	交通・通信の変化						0題(0点)
	現代に残る風習と 民間信仰						0題(0点)
	産業技術の発達と 生活		←-----←	2 1 ② 3	-----→		3題(8点)
	地域社会の変化						0題(0点)
19世紀の日本 の形成と 国際関係	国際環境の変化と 幕藩体制の動揺	5 4-----→				6	3題(9点)
	明治維新と近代国 家の形成	7 15 14 10 9-----→		8	29	16	8題(24点)
	国際関係の推移と 近代産業の成立		18	11 19 ② 12 27	28	17 30	8題(23点)
近代日本 の歩みと 国際関係	政党政治の展開と 大衆文化の形成	13			20		2題(6点)
	近代産業の発展と 国民生活						0題(0点)
	両大戦をめぐる 国際情勢と日本	←-----←		22 31-----→	32 21	33	5題(15点)
第二次世界 大戦後の 日本と世界	戦後政治の動向と 国際社会		24		←-----←	23 34	3題(9点)
	経済の発展と国民 生活			25 26	↓		2題(6点)
	現代の日本と世界			←-----			0題(0点)
問題数(配点)		8題(24点)	3題(9点)	12題(34点)	5題(15点)	6題(18点)	34題(100点)
22年度		8題(24点)	5題(15点)	11題(32点)	6題(18点)	4題(11点)	34題(100点)
21年度		13題(39点)	10題(29点)	4題(12点)	1題(3点)	6題(17点)	34題(100点)

3 試験問題の内容・表現・程度

第1問 「日本史A」の主題学習である「産業技術の発達と生活」をテーマとした問題

問1は情報・通信に関して大正期から1990年代までの幅広い年代にわたって基本的な内容を問う標準的な問題である。高度経済成長期における1950年代の「三種の神器」、1960年代の「3C」の知識があれば正答が導き出せる。社会の変化を知る上で良い選択肢である。問2は「世界史的視野に立った理解」の観点から、中国との戦争が国民生活に与えた影響について問う良問で標準的な問題である。ただし、「漆」に関する記述については現場の授業では深入りしない内容であるため、戸惑った受験者が多かったと考えられる。問3は近現代の日本の都市生活に戦争が及ぼした影響について問う標準的な問題。選択肢がすべて2行ではあるが、江戸幕末から1950年代までの幅広い年代にわたり、基本的知識を問う良問である。第1問は、いずれも歴史の基礎・基本を問う良問で標準的な問題である。ただし、主題学習のねらいが設問に反映されているとはいえないため、図版等を活用するなどの工夫が欲しい。

第2問 幕末から明治初期にかけての政治と近代化をテーマとした問題

Aは、幕藩体制の動揺期から討幕運動について述べたリード文を読み解く問題である。問1は基本的知識を問う問題であるが、選択肢が二つとも人名というのは単調な感が否めない。事件などを組み合わせて歴史的思考力を問うような工夫が欲しい。問2は天保の改革期の内容を問う問題で、前近代からの唯一の設問である。ただし、「上知令」や「蕃書調所」を扱っていない教科書もあり、選択肢もやや細かい。問3はリード文や図版を活用して歴史的な思考・判断を問う良問で高く評価できる。リード文の「西洋技術の導入」をヒントに図版甲は溶鉱炉（反射炉）と判断でき、図版乙は教科書で扱われている定番の写真で容易に正答できる。

Bは、明治初期の近代化政策について述べたリード文を読み解く問題である。問4は「徴兵令」「新貨条例」「地租改正条例」に関する基本的事項を問う標準的な問題である。問5は文明開化の基本的内容を問う問題であるが、「人力車」の判断はやや難しかったかもしれない。問6は自由民権運動の流れを問う問題で、現場の授業でも押さえさせたい内容である。年代の幅が狭くやや難しいが、受験者にとっては学習の成果が大いに試されるであろう。

第3問 近代の官界・政界で活躍した「金子堅太郎」をテーマとした、「日本史B」第5問との共通問題

リード文が政治・経済・外交・文化など幅広い内容で構成されており、出題者の創意工夫が感じられる。特定の歴史的人物に関する出題は4年連続である。問1のXは新政府成立以前の留学生派遣の有無を問うているが、正誤を判断するキーワードがないため難しい。Yの「中江兆民」に関しては明治初期の基本的な人物であるが、著作物で判断するには難しい。問2は③の「コンツェルンの形態が広くみられた」時期を特定するのはやや難しい。また、④の「一部の工業分野で」という表現は抽象的である。②に「紡績会社が設立」とあるため、対比する意味でも「製糸業」と出した方がよかったのではないかと。問3は「世界史的視野に立った理解」という高等学校学習指導要領のねらいにそった良問であるが、現場の授業では「八幡製鉄所」の原燃料については深入りして扱わないため、やや難しい。問4は明治後期から大正後期までの政治の流れを問う良問であるが、具体的な政党名で正誤を判断させることは細かすぎて受験

者にとっては難しい。第3問は全体として難しい問題が多かった。共通問題なので標準2単位科目の特性及び「日本史A」の受験者層を考慮した作問をお願いしたい。

第4問 明治期の政治と外交をテーマとした問題

Aは、大日本帝国憲法について述べたリード文及び図版・史料を読み解く問題である。問1は基本的知識を問う問題で、やや易しい。問2はリード文及び設問文中の「図も参考にしながら」というヒントをもとに歴史的思考力を問う良問である。問3は図版と史料をそれぞれ読み解くことで思考・判断を問う良問であり、出題者の創意工夫は高く評価できる。このような手法は今後も継続していただきたい。

Bは、ビゴーの風刺画を用いて、1880年代後半の東アジアの国際情勢を問う問題である。問4は定番の図版を用いるなどの工夫は評価できる。ただし、図版のa～cの各国（aはロシア、bは日本、cは中国）の判断に加え、各選択肢の正誤まで問われており、やや難しい。問5は韓国保護国化から韓国併合までの歴史の流れを問う良問である。2010年は韓国併合から100年目で、このような問題は、日韓関係の歴史認識を深める意味でも大変重要である。年代の幅が狭いためやや難しいが、この程度の難易度であれば選択肢六つの設問として妥当である。

第5問 近現代の経済・社会をテーマとした、「日本史B」第6問との共通問題

Aは、日露戦争から昭和初期における日本の社会・経済・文化について述べたリード文を読み解く問題である。問1はリード文の内容を理解することで正答が導き出せる標準的な問題である。問2は下線部の「スペイン風邪」の記述と日本人医学者との功績を結び付けることは受験者にとっては分かりづらい。「野口英世」の黄熱病は容易だが、破傷風に関しては「北里柴三郎」と「志賀潔」で迷ったのではないかと問う。問3は第一次世界大戦後の経済動向を問う年代順配列問題である。各選択肢はいずれも重要事項であり、因果関係を理解する上でも授業でしっかりと押さえさせたい内容であるが、選択肢六つの設問であり、やや難しい。

Bは、昭和初期から敗戦直後の経済動向について述べたリード文を読み解く問題である。問4はリード文の内容を理解することで正答が導き出せる標準的な問題。日英同盟の廃棄がワシントン会議の四カ国条約締結時であり日中戦争の開戦前であることは、受験者も判断できたであろう。問5は日本銀行券の発行高と物価水準の推移のグラフを読み取る問題である。資料を用いながら歴史的知識や思考力を問うており、設問に工夫が感じられる。

Cは、高度経済成長期以降の社会・経済について述べたリード文を読み解く問題である。問6は戦後の外交政策についての標準的な問題である。戦後の日米・日韓・日中関係については、歴史的認識を深める上でも現場の授業でしっかりと押さえさせたい内容である。問7は「プラザ合意」「破壊活動防止法」「美濃部亮吉」については、現場の授業では深入りしない内容であり、正答を導き出すことは難しい。基本的な知識を踏まえた上での理解を問うような工夫が欲しい。問8はX・Yともに基本的な内容を問う標準的な問題。第5問は細かい知識を求める設問もあり、全体としてやや難しかったが、グラフを用いて歴史的思考力を問う問題や、現代にもつながる重要な外交課題についての歴史認識を深める問題もあった。出題者の創意工夫は高く評価したい。

第6問 近現代の戦争とメディアをテーマとした問題

Aは、日清・日露戦争期におけるメディアの役割、文化や世相について述べたリード文を読み解く問題である。問1は歴史的用語を問うものではないため、戸惑った受験者が多かったのではないかと。問2は日露戦争に際しての反戦論・非戦論に関する標準的な問題である。ただし、④は「幸徳秋水」として、人物の主張に統一してもよかったのではないかと。問3は、「坪内逍遙」「川上音二郎」の業績や「教育委員会の設置」は、現場の授業で深入りしない内容であり、やや難しい。問4は地図を用いて地理的な空間認識と歴史的思考力を問う良問であり、昨年度の要望が受け入れられたものと高く評価できる。今後も継続していただきたい。ただし、Xは長春、Yは漢城（京城）と理解した上で、地図上の位置を特定しなければならず、やや難しい。

Bは、日中戦争から敗戦に至る時期のメディアの役割について述べたリード文を読み解く問題である。問5はリード文の内容を理解することで正答が導き出せる標準的な問題である。問6は戦時下のメディアについて思考力を問う、標準的な問題である。ただし、③の「検閲」の意味は受験者には難しかったかもしれない。問7は戦前から戦後にかけての大衆娯楽に関しての出来事を年代順に配列する問題である。Ⅲの「トーキー」は現場の授業では深入りしない内容であるため、時期の特定は難しいが、Ⅰの手塚治虫の『鉄腕アトム』は比較的容易に判断が可能である。難易度もこの程度であれば、選択肢六つの設問として妥当である。問8は映画のポスターを活用したことで設問に工夫は感じられる。ただし、ポスターがなくても正答を導き出すことができるため、図版活用のねらいが設問に反映されているとは言い難い。選択肢に工夫が欲しい。

4 要 約

前文で述べた(1)～(4)の視点についての意見・要望を記すことにする。

- (1) 今年度の「日本史A」は全体として基礎・基本的事項を問う問題が多く、標準2単位科目の特性を踏まえた出題となるように配慮されたと言える。今年度は昨年度よりも平均点が上昇し、「日本史B」との平均点較差も縮小したことは高く評価できる。今年度の特徴として、一つの事項を掘り下げて問う問題は1題のみであり、昨年度の要望が受け入れられたものと評価できるが、第2問の問4の「第1回内国勸業博覧会」、第3問の問1の『自由之理』の翻訳者、問7の「美濃部亮吉が東京都知事に当選」、第6問の問3の「坪内逍遙」「川上音二郎」に関する内容、問7の「トーキー」など現場の授業で深入りしない内容が多かった。次年度以降は更に教育現場の実態を踏まえた上で、平均点60点を目安とするセンター試験の本旨・目標にそった出題をお願いしたい。出題範囲については前近代の「天保の改革」から1990年代までであり適切であった。前近代からの出題については高等学校学習指導要領に準拠し、作問に当たっては十分配慮していただきたい。
- (2) 「世界史的視野に立った理解」という観点からは、「外交」の出題が昨年度の半減から更に減少し3題であったことは大変残念であった。第5問の問6のように現代の重要な外交課題につながる出題は、歴史認識を深める上でも大変重要であるため、次年度以降は出題を増やしていただきたい。「歴史的思考力」という観点からの設問は、昨年度の4題から6題に増加した。図版・グ

ラフ・史料など多様な資料が取り上げられ、出題についても複数の分野や異なる年代にまたがって、知識の定着度や思考力を問う問題が多かった。特に、第6問の問4は、地図の空間認識と歴史的思考力を組み合わせた問題であり、昨年度の要望が受け入れられたものと高く評価できる。次年度以降も継続して出題をお願いしたい。

- (3) 今年度は昨年度と同様に、複数の時代や分野にまたがって幅広く思考・判断を問う問題が多かったことは評価できる。時代別では「近代産業の発展と国民生活」の項目からの出題が皆無だったのに対し、「明治維新と近代国家の形成」「国際関係の推移と近代産業の成立」の項目からの出題が他の項目と比較して多かった。分野別では外交史が昨年度に引き続き減少（昨年度の15点から今年度は9点）し、社会・経済史が昨年度に引き続き増加（昨年度の32点から今年度は34点）して分野別・時代別ともに偏りが見られた。次年度以降は基礎・基本事項を問うバランスのとれた出題となるよう、強くお願いしたい。
- (4) 出題方法や表現については、年代順配列問題が昨年度に引き続き減少し4題であったが、思考・判断を問う良問が多かった。選択肢六つの設問は正確な理解を問うためにも必要な措置と考える。次年度以降も出題をお願いしたい。ただし、選択肢六つの設問は平均点に与える影響が大きいため、問題数については今年度の4題程度が適当と考える。センター試験の本旨・目標にそった出題及び「日本史B」との平均点の均整化を図るという点では、「日本史B」との共通問題を減らす努力や難易度を下げる取組みを強くお願いしたい。センター試験は教育現場へ与える影響が大きいため、出題者は「日本史A」の受験者層及び現場の授業の実態を踏まえながら、基礎・基本事項を中心に歴史的思考力を問うような出題をお願いしたい。出題数は昨年度と同じ34問で、60分の試験問題として適切であったと考える。

日 本 史 B

1 前 文

平成23年度大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）における「日本史B」の平均点は64.11点で、昨年度と比較すると2.60点上昇し、「日本史B」の試験としては、昨年度に引き続き60点を上回り、全体的に標準的な問題と評価できる。この結果の主な要因について、次のように分析した。

- ① 高等学校の授業で重視する各時代の特徴及び歴史的事象の推移・変化を問う小問が多く見られ、高等学校段階の学習の到達度を測る内容として適切であった。
- ② 設問形式では、空欄を補充する形式の小問が、日本史の学習内容として基礎・基本と言える用語選択を問う問題であったことと、年代配列を選択する形式の問題数が減ったことが考えられる。
- ③ 資料の取扱いでは、今年度は受験者が戸惑うことの多い史料や地図が、高等学校の教科書にほぼ掲載されているものを使用したので、解答を導きやすかったと推測する。

このように、高等学校「日本史B」の学習成果を評価する問題として、①の時代の特徴及び歴史的事象の推移・変化を問う問題や、②の設問形式と学習内容の程度のバランス、③の資料の取扱いについて、今後も作問のあり方に継続して反映していただくことを強く希望したい。

今年度のセンター試験問題の検討評価に当たっては、次の4項目を中心に行った。

- (1) 高等学校学習指導要領（以下「学習指導要領」という。）に準拠し、教科書の内容や授業実態に即した出題であったか。
 - (2) 時代別・分野別の出題バランスは適切であったか。また、基本的な知識の理解や歴史的思考力を評価するのにふさわしい問題であったか。
 - (3) 「細かな事象や高度な事項・事柄」に深入りすることなく、60分の試験時間にふさわしい出題内容、難易度であったか。
 - (4) 設問形式、表現、図表や写真の取扱いに配慮した適切な出題であったか。
- (注) 文中で具体的に上げる際は、解答番号で表記した。

例 15 = 解答番号15の設問

2 内 容・範 囲

今年度の試験は、理解力や歴史的思考力を問う姿勢を継承し、学習指導要領の目標に即しての出題であった。しかしながら、出題傾向や内容の取扱いについて検討していただきたい点もある（「 」内は学習指導要領からの引用語句である）。

(1) 出題傾向

出題傾向について、時代別及び分野別の視点からそれぞれ概観すると次のようなことが言える。

時代別では、近現代史重視の出題傾向は継続しているが、時代のバランスはおおむね適切であった。近現代史については、これまで高等学校現場から要望した高度経済成長期までの出題の

枠を超えて、1980～90年代の選択肢が出され、1990年代を歴史ととらえるメッセージとして読み取れる。ただし、これ以上出題が現代史に偏らないようお願いしたい。

分野別では、外交史・社会経済史・文化史の割合が増加し、政治史が減少した。外交史は昨年度の要望に上げたように、高等学校の単元構成の実情を考えると、各時代の特徴を考える分野であり、今回大幅に減少した政治史とともに、高等学校段階の日本史学習として「世界史的視野に立って各時代の特徴及び変遷を総合的に考察」できる分野として重視していただきたい。社会経済史・文化史については、昨年度に引き続き「歴史を構成する要素を総合した幅広い見方で大きく把握させる」点で重要で、作問の方向性として評価できる。ただし、時代を超えて総合的にとらえることに配慮する傾向を重視したため、表1の分野別区分の縦方向の矢印は多く見られるが、各時代の特徴を問う横方向の矢印が少ない。各時代の特徴と時代を超えた大きな流れという二つのとらえ方を小問構成に反映していただきたい。

(2) 「歴史の考察」を意識した出題

第1問は、明かり（照明）をテーマとする、大学生とその弟の高校生との会話をリード文とした出題となっている。「歴史の考察」の「歴史の追究」では「我が国の歴史の展開について、時代ごとに区切らない主題を設定し追究する学習を通して、歴史的な見方や考え方を身に付けさせる」とし、「内容の取扱い」の主題の観点として、例示された「(ア)日本人の生活と信仰」の衣食住の「照明の推移とその原料などを取り扱」っている。明かり（照明）というテーマは、時代を超え、生活の変化として受験者にとって身近でなじみのある素材である。また、リード文から導く小問の構成としては、[1]では古代の宗教を、[2]では平安時代の地方政治の流れを問い、多分野に設問が派生する構成となっている。

「歴史上の人物の果たした役割や生き方」を素材とする大問が、今年度は第6問から第5問へ変更された。金子堅太郎という人物を素材に近代史の流れを受験者に説明するリード文が構成されている。このような大問は、高等学校の授業構成を考える上でのメッセージ性も大きく、興味深い。

(3) 理解力・歴史的思考力を重視する姿勢

「日本史B」の目標の一つである歴史的思考力を育成するために、歴史的事象の推移や流れを問う小問が多く見られ、理解力・歴史的思考力を重視した問題作成が積極的に行われていることに敬意を表したい。

[8]は、古墳時代を前期・中期・後期と時期を分けて、副葬品からその被葬者の性格を考察する。[17]は京都について、[18]は動物を取り込んだ作品に関して、時代を超えたテーマで選択肢が作成されている。[23]では、江戸時代の人材登用・人材育成について、史料の内容と対比して特徴を問うている。[26]は、明治から大正時代の資本主義の特徴的な段階についての理解力を要求する良問である。

また、[27]は、一見知識を問うているだけに思えるが、高等学校の授業で、なぜ北九州に製鉄所を設立したのか、を考えさせていることを想定している小問と言え、地理的条件や歴史的背景などと関連させて歴史的思考力を育ててほしいというメッセージ性がうかがえる。

[33]は、資料の読み取りだけでなく、金融緊急措置令の内容及びその結果を踏まえて考えることが必要であり、またドッジ＝ラインの意義とグラフの東京小売物価指数の推移を確認させると

いう資料の活用と歴史的事象の説明を組み合わせた、歴史的思考力を問う良問である。

時代別・分野別出題傾向（表1）

表中の白抜き数字は各2点、それ以外は各3点

区 分		政 治	外 交	社 会 経 交 通	文 化 思 宗 教	資 史 料 図 絵 地 図	出題数・配点 () 内は22年度 [] 内は21年度
原始・古代	先土器時代						8 題 22 点 (7 題 20 点) [7 題 19 点]
	縄文時代						
	弥生時代						
	古墳時代	8			7		
	飛鳥～ 白鳳時代						
	奈良時代			↓ ↓	1	9 10	
	前期 平安時代 中期	↑ 2	←	12	11		
中世	院政時代	↓	←	↓	13		5 題 14 点 (9 題 24 点) [4 題 12 点]
	前期 鎌倉時代 後期	14					
	南北朝時代			↑			
	前期 室町時代 後期		←	3	16	15	
			←				
近世	織豊政権時代				18	17	9 題 25 点 (7 題 19 点) [10 題 28 点]
	前期 江戸時代 後期	↑ 19 22 23	←	21	4	24	
			←	20			
近代	前期 明治時代 後期		25	6	26		10 題 27 点 (11 題 31 点) [12 題 32 点]
		28	↑	5	27	30	
	大正時代	↓		31	29	↓	
	前期 昭和時代 大戦期	32	→	↓			
現代	戦後～占領期				←	33	4 題 12 点 (2 題 6 点) [3 題 9 点]
	高度経済成長期	35	34	36			
	～現代			→ ↓			
23年度出題数・配点		9 題 25 点	4 題 12 点	11 題 28 点	7 題 20 点	5 題 15 点	36 題 100 点
22年度出題数・配点		14 題 39 点	2 題 6 点	10 題 27 点	6 題 16 点	4 題 12 点	36 題 100 点
21年度出題数・配点		17 題 46 点	8 題 22 点	6 題 17 点	2 題 6 点	3 題 9 点	(36 題 100 点)

(4) 内容の取扱い

政治史中心から、外交史・社会経済史・文化史の出題が増加し、歴史の展開を「総合的に考察させる」姿勢がより明確になった。しかしながら、[6]については、出題傾向の箇所でも述べたが、今後1990年代の歴史的事象についての問いを増やすことは避けていただきたい。[24]については、正しいものの組合せを問う設問形式で、bの通信使一行と国内の文人の交流の有無やdのシーボルトの弟子がだれかを判断させる内容は、評価する学習内容としては細かすぎる。[25]は、選択肢の内容に質的レベルの違いを感じる。正誤の組合せを選択する形式では、レベルの差がないように配慮をお願いしたい。

3 分量・程度

問題数は、大問が6題、小問が36問であった。60分の試験時間を考慮すると、大問、小問の数は適切であると言える。また各小問で提示される選択肢や組合せ問題の文章等、解答にかかわる文章が2行にわたるものも30文と若干減少した（昨年度は33文、一昨年度は32文）。さらに文章の正誤を選択する形式の問題が11問あるが、選択肢の文章がすべて2行にわたる設問は[21]・[35]と2問に減少した（昨年度は5問）。以上のことから、増加傾向にあった情報量が今年は抑えられたと見ることができる。

試験問題の程度に関しては、情報量の減少を含めてやや易化したと見られる。第1問のテーマ史は、正誤問題において誤文選択の判断がしやすい配慮がなされていた。具体的に示すと、[3]の蝦夷地は中世の単位でも出てくる用語であるが、俵物・長崎と併せて読めば近世について述べた文章であると判断しやすくなっている。

また、受験者になじみ深い史料を扱っている点も評価したい。[10]は授業で必ず取り上げられる壺田永年私財法を史料問題にしている。受験者にとって学習した内容が出題されることは、学習してきたことが無駄ではないことにつながり、問題に取り組む意欲を高める結果につながっている。

今年度も平易な設問が中心であったが、「細かな事象や高度な事項・事柄」に関する理解を必要とする設問も見られた。[28]の正文を選ぶ設問において、政党名だけで誤文を作成していた。特に第1次山本権兵衛内閣の与党は細かな事項と思われる。[31]の1920年代から30年代初頭にかけての各恐慌の年代配列を選択する設問では、配列させる文章に片岡直温を取り上げていた。多くの教科書では取り付け騒ぎを本文中に載せ、注で片岡直温を紹介するものが多く、細かな事象に踏み込んだ感がある。さらに[35]は高度経済成長期の出来事の正文選択問題で、誤文として1985年のプラザ合意が取り上げられているが、日本史以外の分野でも取り上げられることがある。日本史学習だけでなく、幅広い地理歴史科・公民科の学習成果を応用させて思考することに問題作成部会が取り組んだものとして評価したい。ただし、この傾向の出題が増加することは、日本史を学習しなくても応用力で解答を導き出せるものとして、日本史学習本来の意義を希薄化させる側面もあることを併せて提言しておきたい。

4 表現・形式

(1) 設問形式

一昨年度に変更された年代配列問題における選択肢の6択形式化は、今年度も踏襲された。昨

年は7問と一昨年4問より大きく増加したが、今年度は5問となり、この形式の分量としては適正な量と判断したい。ただし[12]では、Ⅰの寄進地系荘園とⅡの僧兵の強訴は同じ院政期であり、年代幅が狭かったと思われる。同じように年代幅が狭いと思われる設問は[18]のⅡの日光東照宮、Ⅲの『唐獅子図屏風』がある。昨年度1問だけ復活した人名や事件名・作品名などの事項を選択する設問はなくなった。暗記・知識に頼る設問がなくなったことは評価したい。文章の正誤の組合せを選択する形式については、昨年度大幅に減少（昨年度は2問、一昨年度8問）したが、今年度は4問となった。同じように昨年2問であった関連事項の組合せを選択する形式も今年度は4問と増えた。前述のとおり年代配列を選択する形式が減少した分が、これらに振り分けられたことになり、表2に示すとおり、形式のバランスが昨年度に比較して偏りがなく作問されていることが分かり、設問形式に問題作成部会の努力と配慮がなされていたことが分かる。

設問形式（表2）

表中の白抜き数字は各2点、それ以外は各3点

設 問 形 式		平成23年度		平成22年度
		問題数	問 題 番 号	問題数
事項（人名・単語）を選択する形式		0		1
文章の正誤を選択する形式		11	[3]、[6]、[10]、[11]、[14]、[17]、[21]、 [26]、[28]、[34]、[35]	12
二つ以上 文章の組 合せ	空欄を補充する形式	7	[4]、[7]、[13]、[16]、[19]、[29]、[32]	7
	文章の正誤の組合せを選択する形式	4	[5]、[23]、[25]、[36]	2
	年代配列を選択する形式	5	[2]、[12]、[18]、[20]、[31]	7
	正しい文章の組合せを選択する形式	5	[1]、[8]、[24]、[27]、[33]	5
	関連事項の組合せを選択する形式	4	[9]、[15]、[22]、[30]	2
		36		36

(2) 表 現

全体的には受験者にとって読みやすいリード文や選択肢となるよう配慮されている。だが設問の内容と、選択肢の文章表現で戸惑いを感じるものがあつた。また、年代配列を考えさせる問題において、文章的な表現の違いで時代差を設けようとしている設問があつた。設問形式のところでも触れた問題だが、[12]については表現でも指摘しておきたい。Ⅰは田地を寄進する者が現れるようになったという文章的な表現で年代差をつけている感が否めない。確かに田地だけを寄進する形態をとった時期と、未開発地を含めて寄進してしまう形態には時代差があるが、これは高等学校「日本史B」の授業ではかなり細かい内容と思われ、その内容を学習していない受験者は文章表現に大きく頼って解答する方法しかなかったと推察される。そのほか[21]の江戸時代の日朝関係に関する選択肢において、対馬が現長崎県に属しているので戸惑った受験者が存在したのではなかろうか。確かに約定を結んだのは対馬藩主であり、交易は朝鮮の倭館で行われたが、長崎という表現に一工夫できなかったか、と思われる。

(3) 図表や写真等の扱い

[9]で用いられた古代の建物の写真に関する問題では、乙が民衆の住居であるのは容易に判断できるので、受験者が正答を導き出しやすい配慮がされていた。[16]で用いられた『洛中洛外図

屏風』は、受験者にとって教科書等で見慣れているであろうものを取り上げており、適切な素材と思われる。[15]の東アジアの地図は、学習指導要領の内容(3)で述べられている「日明貿易など東アジア世界との交流」にそった良問であった。地図から得られる情報は数多くあり、資料活用能力の育成とともに、高等学校の授業で教科書や副教材に掲載されている地図への取組みが必要と思われる。[22]・[23]は注が多い。できるだけ注に頼らなくても読解できる史料選定をお願いしたい。また[33]で使われたグラフは、東京小売物価指数という聞き慣れない指数を使ったこと、右軸の桁が大きくなったことの二つが難化を助長したものと推察される。しかし、桁の大きさから極度のインフレーションが進行していたことを読み取らせようとする意図が伝わる良問であった。今後もグラフや表などデータを伴う資料問題では、読み取りやすいグラフや表、グラフから社会状況をイメージしやすい資料の開発を期待したい。

5 要 約

(1) 高等学校の授業への影響

今年度の問題は、学習指導要領の「日本史B」の目標の一つである「我が国の歴史の展開を、世界史的視野に立って総合的に考察」した授業を想定した評価問題と言える。言い換えれば、高等学校の授業のあり方として、単なる歴史的事象の暗記を求める展開ではなく、資料の比較や歴史的事象がもつ意義を説明でき、生徒が歴史的な見方・考え方を身に付け、各時代の特色及び変遷を考察できる単元構成を行う必要がある。

また、学習内容に関しては、世界の動向や他の地理歴史科・公民科の科目と有機的に結び付いていることを意識し、高度経済成長期後の日本の状況を概観する学習の必要性を今年度のセンター試験からのメッセージとして受け止めたい。

(2) 意見・提案等

今年度は、設問形式の空欄を補充する形式により、各時代の特徴を示すキーワードと言える用語を選択させることで、基礎・基本を確認した評価問題であった。一方で、大きな時代の流れを問う問題や資料の読み取りに歴史的事象を考察する力を加えた歴史的思考力を評価する小問も出題された。内容の重点化を図り、大きな歴史の流れを評価しようとする問題作成部会の姿勢には敬意を表するとともに、全体的な内容の程度として適切であり、今後もこの方向性を継続していただくことを希望する。

しかしながら、設問形式の年代配列を選択する形式において、受験者が解答を導く際に、時代の重なりによる迷いが生じる表現が見られた。また、高等学校における学習の到達度を測るというセンター試験の趣旨を考慮し、正文・誤文を判断する内容として、細かすぎる知識やあいまいな表現が見受けられたことは、来年度ぜひ改善をお願いしたい。

最後に、昨年度・今年度と平均点が継続して60点を上回り、高等学校段階の学習内容を評価する問題として、全体構成や設問形式において適切なレベルであったことは、問題作成部会の意欲的な審議とたゆまぬ努力の成果と受け止め、感謝している。センター試験は、高等学校において最も注目すべき全国的な評価問題としての意義を持ち、影響力も非常に大きい。今後とも内容・バランスともに良質な問題作成に一層工夫がなされることを強く希望する。